

現象学とウィーン：  
フェッター教授の講演に先立って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浜渦, 辰二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006873">https://doi.org/10.14945/00006873</a>

# 現象学とウィーン

— フェッター教授の講演に先立って —

浜 渦 辰 二

## 一 フッサールのウィーン

フッサールの現象学は、一方でフランツ・ブレンターノを父とし、他方でエルンスト・マッハを母として生まれた、  
と  
言うことができる。ブレンターノ、マッハはちょうど入れ違いのようにしてではあるが、ともにウィーン大学で教壇  
に立<sup>(1)</sup>ち、世紀末ウィーンに広く影響を与えていた。<sup>(2)</sup>その影響のなから現象学は誕生したのである。

フッサール自身、旧オーストリア帝国、現在のチェコ領のモラヴィア地方に生まれ、はつきり知られている限りで  
は、その生涯に五回ウィーンに滞在している。<sup>(3)</sup>しかも、それぞれの滞在が重要な意味をもっている。そのうちの最後の  
ものが、最晩年の著作『危機』書の前身となるウィーン講演「ヨーロッパの人間の危機における哲学」のためであ<sup>(4)</sup>った。

一九八九年に始まった東欧社会主義政権の崩壊後、旧東欧諸国でも現象学・解釈学の研究が再開されて来ている。<sup>(5)</sup>「西  
欧—東欧」という枠組みが崩れ「中欧」という概念が復活して来たなかで、<sup>(6)</sup>これまで「西欧」からのみ見られていた現  
象学・解釈学を「中欧」から読み直す、という試みも現れてきているが、そこではかつての「中欧」の首都ウィーンが  
中心的役割を果たしつ<sup>(7)</sup>つある。このような状況のなかで、現象学と解釈学の揺籃期に通暁したウィーン大学フェッター

教授の仕事は興味深いものとなる<sup>(8)</sup>。

## 二 ブレンターノ、マッハ、フロイト、フッサール

フッサールとハイデガーはともにブレンターノから大きな影響を受けているが、二人が影響を受けたのは、それぞれブレンターノの異なる側面からであった。ハイデガーにとってブレンターノは何よりその博士論文『アリストテレスによる存在者の多義性について』の著者であった<sup>(9)</sup>が、フッサールにとっては『経験的立場からの心理学』の著者であった<sup>(10)</sup>。フッサールはブレンターノから「志向的」という概念を継承したが、ブレンターノの内に潜んでいた心理学主義を排除しながら、それを換骨奪胎して、「志向性」という現象学の基本的な概念へと練り上げていった。

フッサールはウィーン大学でブレンターノの哲学と心理学の講義を聴講し、そこで数学から哲学へと転向したが、マッハがウィーン大学に招聘されて来るより前に、すでにハレ大学の講師となっていた。しかし、マッハの著作は熱心に読んでいたようで、「現象学」という名前もマッハの著作から受け継いだものと思われる<sup>(11)</sup>。フッサールはマッハの経験主義には共感しながらも、その現象主義⇨感覚主義には同意できず、それを退ける手がかりとなったのが「志向性」の概念であった。従って、しばしば（特に英語圏では）混同される現象主義と現象学を隔てるのも、この「志向性」の概念である。

この志向性の概念は、フッサールの思索の進展とともに拡大され深化されて使われており、「意識とはつねに何かについての意識である」という、当初人口に膾炙した定義では充分ではない。特に、すでに『イデーノ第I巻』においても、目立たない仕方ではあるが主張され、一九二〇年代のフライブルクの講義において前面に出てくるようになった

「地平志向性」の発見は、志向性の概念を決定的に飛躍させるものであった。志向性は、単に対象に関わる顕在的な状態においてのみならず、それと同時に、対象の背景や地平に関わる潜在的な状態においてすでに機能している。<sup>(12)</sup>

フッサールが「発生的現象学」という構想を展開するようになるのも、同じ一九二〇年代の講義においてであった。この構想のなかでフッサールは、自然的態度においては「匿名的」に「無意識のうちに」働いている機能を取り出そうとしている。それは、さしあたり現象・現前しているものの「深み」へと、志向性の「発生」を問おうとするものである。フッサールが「アルケーについての学」という語 (Archäologie) が別の学問すなわち考古学のために使われているのを残念がるのも、このような脈絡においてであった。ここにおいて私たちは、しばしばまったく対極にあるかのように見なされているフロイトの精神分析との接点を見いだすことも可能となるろう。<sup>(13)</sup> フロイトもまた考古学の趣味を持つと同時に、精神分析のことを遺跡を発掘する考古学にも似た作業と考えていたのである。

因みに、フロイトもまた世紀末ウィーンと深い結びつきがあることは、よく知られている。<sup>(14)</sup> しかし、恐らくそれほど知られていないと思われるのは、フロイトとフッサールとの出自の近さである。フッサールは一八五九年当時オーストリア (ハプブルルク) 帝国 (フッサールが八歳の一八六七年に、同帝国はオーストリア・ハンガリー二重帝国となる) のモラヴィア地方 (現在のチェコの東半分) 北東部の田舎町プロスニッツ (これはドイツ語読みで、チェコ語ではプロチェヨフ) に、ユダヤ人旧家出身で洋品店を営む父の家庭に生まれ、ウィーンとオルミューツ (チェコ語でオルモイツ) でギムナジウムに通い、ライプツヒとベルリン (一八七一年にプロンセン主導のドイツ帝国が成立した直後) の大学で学び、ウィーン大学で博士号を取り、その後は、ハレ、ゲッティンゲン、フライブルクとずっとドイツの大学で教壇に立つことになる。そして、最後は、故郷である (マサリクの建国した)<sup>(15)</sup> チェコスロバキアのプラハ大学への招聘も断り、一九三八年フライブルクで生涯を閉じることになった。他方、フロイトは一八五六年 (フッサールより三歳年上)

同じオーストリア帝国の同じモラヴィア地方北東部の田舎町フライベルク（現在チェコ領、チェコ名プジーボル）に、毛織物から服を作って売り歩くユダヤ人商人の父の家庭に生まれ、三歳の一八五九年にはライプチヒに転居し、さらに翌年にはウィーンに転居、ここに落ち着くことになった。そして、一九三八年（フッサールの亡くなった年）にウィーンを離れてロンドンに亡命したが、翌年にはロンドンで生涯を閉じた。ほとんど同じ地方で同じような境遇から生まれたが、その後、それぞれの道を辿り、ドイツでナチスの迫害に押し込められながら死んでいったフッサールと、同じ年にナチスの迫害を逃れて亡命していったフロイト、その生涯は対照的であるが、両者が不思議に共有していたものがあるように思えるのである。<sup>(16)</sup>

### 三 フッサールとハイデガー —— 見えないものの現象学 ——

さて、今回のフェッター教授の講演は、「初期ハイデガーの世界概念」というテーマなので、最後にフッサールとハイデガーについて、私が両者の関係について最近考えていること（それは恐らくフェッター教授の理解とは異なることになるだろう）を簡単に述べて、フェッター教授の講演を理解する（あるいは、講演の後の討論のための）手掛かりとしていただきたい。<sup>(17)</sup>

一九二七年の『存在と時間』の刊行以来、ますます「現象学」という語を使わなくなっていたハイデガーは、一九六三年の回想「現象学へ入って行った私の道」のなかで、現象学という表題が消え去ったとしても「思索の可能性」としての現象学は保持されると述べていた。また、一九七三年の「ツェーリンゲン・ゼミナール」でのハイデガーは、この「可能性としての現象学」を「顕現せざるものの現象学（Phänomenologie des Unscheinbaren）」と呼んだ。しかし、

それはあくまでも後期ハイデガー流に解された限りでの現象学であり、「現象するものに現象することを可能にしながら、自らは現象しないもの」つまり「存在」の思索のことにほかならなかった。

初期フライブルク時代の一九一九年の講義（いわゆる戦時短縮学期講義）『哲学の理念と世界観問題』や一九二三年の講義『オントロジー（事実性の解釈学）』が、すでに『存在と時間』につながる現存在分析を準備しながらも「可能性としての現象学」を擁護する姿勢にあったのに比較すると、一九二三年マールブルクに赴任して二年後、一九二五年の『時間概念の歴史のための序説』（以下、『序説』と略）は、フッサール現象学に対してはっきり批判的な態度をとるに至っている。『序説』は、ハイデガーがもつとも丁寧なフッサール現象学を辿り、手際よく論点を纏めながら批判を加えてゆき、そのなかから『存在と時間』で展開される思索が熟成していくという、言わばフッサール現象学への訣別を宣言する講義とすることもできる。

同じ時期のフッサールに目を移すと、彼はフライブルク大学の教壇に立っていた十二年間（一九一六年～一九二八年）には新しい著書を一冊も出版していない。しかし、この十二年間の「沈黙の時代」は決して「不毛の時代」ではなく、この時代の講義はいずれも、一步一步登っていくフッサールの思索の新しい段階を示す重要なものである。ここでは、ちょうど同じ一九二五年に、フライブルクで行われたフッサールの講義『現象学的心理学』と、マールブルクで行われたハイデガーの講義『序説』という二つの講義の対比に着目したい。

『序説』のハイデガーは、同じ時期フッサールの側で生まれ出ずる思索の状態にあった原稿を見る機会があったにもかかわらず、それらを十分吟味した様子が見られない。同じ頃フッサールの思索のなかで進行していたにもかかわらず、ハイデガーが見逃してしまったことは、地平の現象学および発生的現象学であった。これらを私たちはフッサールにおける「見えないものの現象学（Phänomenologie des Unsichtbaren）」と呼ぶことができる。『序説』のハイデガ

ーは、こうしたフッサール現象学の新しい動きを見ようとはしていないし、晩年の「私の道」や「ゼミナール」でも、これらの動きについてはまったく触れられていない。それらにハイデガーはもはや関わりとうとはせず、それ以前のもの（フッサールにとってはもはや脱け殻だったもの）によってフッサール現象学を総括し批判し訣別をし、『存在と時間』へのステップを登って行った。ハイデガーは、やがて、自ら規定した現象学の方法ではもはや近づきえないものに気づき、現象学から離れていくことになる。それが決定的に行われるのは、いわゆる「転回 (Kehre)」によってであった。なるほど晩年のハイデガーは「顕現せざるもの現象学」を可能性として認めるが、その時、現象学とはどのようなものとして理解されるべきなのか、それはハイデガーにとって必ずしも明らかではなかったように思われる。筆者には、この「転回」によってハイデガーは、突然媒介のないままに言わば向こう側に行ってしまった、向こう側から語り始めるといふ印象がしてならない。かつて、ヘルトが、ハイデガーは開示性の次元を「世界」とすべきだったのにそれを「存在」としてしまった、と述べていたこともこのことに関わるものであった<sup>(18)</sup>。

それと較べ、フッサールの「見えないもの現象学」は、あくまでも「見えるもの」の媒介を通じて一步一步「見えないもの」へと突き進み、この「見えない」ものを少しずつ明らかにしていこうとする。フッサールの「見えないもの」とは、あくまでも、「見えるもの」をてがかりに、「見えるもの」を通じて、「見えるもの」との繋がりのなかで、次第に明らかになるものなのである。これを図式化すれば、フッサールの「世界」とハイデガーの「存在」とを対比させることができようか。そこで、いま筆者が抱く疑問はこうである。ハイデガーは現象学の可能性をしばしば「方法」として評価していたにもかかわらず、フッサールの「見えないもの現象学」に関心を向けることなく、それ以前の現象学理解を基にフッサール現象学から離れていったとき、ハイデガーは「そこへ至る道」「通路」「手引き」としての「方法 (meta-hodos)」をも見失ってしまったのではないだろうか。

この筆者の疑問をいま一度、フェッター教授の講演と結び付けて考え直すことは、聴衆（そして読者）の皆さんとともに筆者にも課せられた課題である。

#### 四 フェッター教授の紹介

最後にフェッター教授の略歴と業績を紹介しておこう。

##### 〔略歴〕

一九四二年生まれ 現在、ウィーン大学教授

一九九五年 オーストリア現象学会会長

オーストリア内外の大学で客員講師（オーストリアのインスブルック、グラーツ、チェコのプラハ、ポーランドのワルシャワ、スロヴェニアのリュブリャナ、スロヴァキアのブラティスラヴァ、ウクライナのレンベルク、ドイツのフライブルク、ミュンヘン、オランダのニーメンゲン）を勤める。

##### 〔業績〕

##### （著書）

• *Stadien der Existenz. Eine Untersuchung zum Existenzbegriff Sören Kierkegaards.* Wien/Freiburg/Basel, 1979.

• *Der Schmerz und die Würde der Person.* Frankfurt, 1980.

##### （論文）

• “Zeichen des Anderen. Zum zweiten Hauptwerk von Levinas mit Bezug auf Heidegger” in: *Deutsche Zeitschrift für*

- “Die philosophisch-anthropologischen Wurzeln von Freuds Psychoanalyse”, in: M. Heitiger/A. Wegner (eds.): *Kanzel und Katheder. Zum Verhältnis von Religion und Pädagogik seit der Aufklärung*. Paterborn, 1994.
  - “Dilthey, Freud und die Hermeneutik”, in: *texte-psychoanalyse, Ästhetik, kult urkritik*, 14, 1994.
  - “Das Reflexionszeitalter. Kierkegaard und der Nihilismus”, in: D. Basta et al. (eds.): *Kriza i perspektive filozofije*. Beograd, 1995.
  - “Phänomenologie und Hermeneutik als Grundlage der daseinsanalytischen Psychotherapie”, in: *Daseinsanalyse*, 12, 1995.
- (編著)
- Martin Heidegger: *Geschichte der Philosophie von Thomas bis Kant. Gesamtausgabe*, Bd. 23 (in Vorbereitung).
  - *Zahlreiche Lexikonartikel, zuletzt 12 Autoren für das Große Wertlexikon Philosophie*, Kröner-Verlag (im Erscheinen).

注

(1) ブレンターノは一八七四年からウィーン大学の教授となったが、一八八〇年にそれを辞し、私講師として一八九四年にウィーンを去るまで留まった(教授としては六年間であるが、通算すると二〇年間、ウィーン大学の教壇に立っていたことになる)。他方、マツハは一八六〇年に学位、一八六一年に教授資格とともにウィーン大学で取得した後、グラーツ大学・プラハ大学で教鞭を取っていたが、一八九五年(ブレンターノがウィーンを去った翌年)にウィーン大学に教授として招聘された。一八九八年卒

中に襲われ、右半身付随で講義できなくなり、一九〇一年に大学を辞め、一線から完全に退いた(ウィーン大学の教壇に立っていたのは、わずか三年間ということになる)。

(2) マッハが世紀末ウィーンに与えた影響については、次を参照。W・M・ジョンストン『ウィーン精神1』みすず書房、一九八六年。S・トゥールミン/A・ジャンク『ワイトゲンシュタインのウィーン』TBSブリタニカ、一九七八年。野家啓一「世紀末の認識論——エルンスト・マッハと『ウィーン精神』——」『エピステーメ』一九七六年五月号(特集 ウィーン 明晰と霧り)所収(現在は、『無根拠からの出発』勁草書房、一九九三年、所収)。他方、ブレンターノが「ウィーンのみならず、オーストリア全土に決定的な影響を及ぼしていた」ことについては、Edmund Husserl, "Erinnerungen an Franz Brentano" (in: *Husserliana* Bd. XXV) および、小倉貞秀『ブレンターノの哲学』(以文社、一九八六年) 参照。

(3) 最初は、一九六八年(九歳の時)にウィーンのレオポルトフォアシュタットのギムナジウムに一年間だけ通った。二度目は、ベルリン大学で数学を専攻し、ヴァイアシュトラウスに師事していたが、一八八一年(二十二歳の時)、オーストリアで博士号を取るためにウィーン大学に移り、ケーニヒスベルガーのもとで学位論文「変分法論考」を提出し、再びベルリンに戻るまでである。三度目は、一八八二年(翌年)、一年間の志願兵役の後ウィーンに留まり、マサリクの勧めにより、一八八六年夏まで(四年間)ブレンターノの哲学と心理学の講義を聴講した(前述のように、ブレンターノが私講師になっていた頃である)。一八八六年春には、ウィーンのプロテスタントの教会で洗礼を受けている(フッサールはユダヤ旧家出身で洋品店を営む父の家系に生まれ、ドイツ語学校に通った「ドイツ系ユダヤ人」だが、ここでいわゆる「同化ユダヤ人」となったわけである。「同化ユダヤ人」については、村山雅人『反ユダヤ主義——世紀末ウィーン政治と文化——』講談社選書メチエ、一九九五年を参照)。一八八六年秋には、ブレンターノの推薦で、シュトゥンプのもとで教授資格論文を書くためにハレに移る。四度目は、一九〇一年(三十三歳でゲッティンゲン大学員外教授に就任した年)に休暇をウィーンで過ごし、この時マッハを訪問している。そして、最後の五度目は、一九三五年(六十七歳)にウィーン文化連盟の招きでウィーンを訪れ、「ヨーロッパ的人間性の危機における哲学」という題で講演を行った。以上五回というのは私が『フッサール年代記』(Karl Schuhmann, *Husserl-Chronik, Denk- und*

*Lebensweg Edmund Husserls*, Martinus Nijhoff, 1977) を見ながら目についたものを拾っただけなので、もっと調べれば出てくる

かも知れない。

(4) 講演原稿は現在 *Husseriana* Bd. VI, S. 314-348 に収録されている。この講演によって、「一週間の間ウィーンに大センセーションが続いた」という。

(5) 一九九五年九月フライブルクで開催された学会「フッサールとハイデガーをロシア語に翻訳することをめぐって」も、そのようなプロジェクトの一環として行われたものであった(筆者自身、そこで「日本のプロジェクト・フッサール・データベース」という題で報告を行った)。同学会は一九九八年にはザンクト・ペテルスブルクで開催される予定である。

(6) 「中欧」については、次のようなものを参照。加藤雅彦『中欧の復活——「ベルリンの壁」のあとに』、NHKブックス、一九九〇年。林忠行『中央の分裂と統合——マサリクとチェコスロバキア建国』、中公新書、一九九三年。『別冊宝島 中欧世紀末読本』、宝島社、一九九七年。

(7) 「オーストリア現象学会」は初めカール・ウルマーによって創設されたが、彼の死後、ずっと活動が停滞していた。一九九五年にフェッター教授を会長とする新しい執行部が選出されて、活発な活動を再開している。現象学的な方向の哲学を促進することと、心理学・精神療法・精神医学・社会学・教育学などの個々の学問分野の代表者達との共同作業とを活動目標にしている。もう一つの重点は、現象学と解釈学の関係に置かれている。『現象学の根本概念のレキシコン』の出版を企画している。一九九七年十一月にもウィーン大学で、『存在と時間』出版後七十年」と題した研究会を開き、フェッター教授自身の講演から始まって、フェエル(ハンガリー)、クリンステイン(イタリア)、グロスマン(ドイツ)、マルクライター(ドイツ)、フィガル(ドイツ)、ホルツヘイリクンツ(スイス)、フヴァティク(チェコ)、チェルニャコフ(ロシア)、グッツォーニ(ドイツ)といった面々が発表をしている。また、ウィーン大学内部にも「現象学作業グループ (Arbeitsgruppe Phänomenologie)——現象学およびそこから発した刺激の受容の促進と批判的な形成のための協会」という、「オーストリアにおける現象学に公開討論の場を与えるために、若い学生・院生・教員らによって一九九四年に創設された」集まりができています。年に二回、『現象学ジャーナル』を発

行している。この集まりにおいてもまたフェッター教授が中心的な役割を果たし、ウィーン大学でフッサールの『危機』書、ハ  
イデガーの『存在と時間』などの読解を行っている。(以上すべて、インターネットから得た情報であり、詳しくは、「オースト  
リア現象学会」については、<http://hhobel.phil.univie.ac.at/oegesph/>を、「現象学作業グループ」については、<http://hhobel.phil.univie.ac.at/gph/gpd.html>をそれぞれ参照されたい。)

(8) 下記のように、同教授は、ポーランド、スロヴェニア、スロヴァキアなど、いわゆる中欧と呼ばれる国々で客員講師として招か  
れている。業績についても、下記参照。

(9) Martin Heidegger, "Mein Weg in die Phänomenologie", in: *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer, 1976.

(10) Edmund Husserl, *Philosophie der Arithmetik*, in: *Husserliana* Bd. XII, Martinus Nijhoff, 1970.

(11) Vgl. Ders., *Husserliana* Bd. IX, S. 302f. 木田元「現象学とは何か」(木田元ほか編『講座・現象学Ⅰ 現象学の成立と展開』弘  
文堂、一九八〇年、所収)も参照。

(12) ここの辺りの議論について詳しくは、拙著『フッサール主観性の現象学』(創文社、一九九五年)を参照されたい。また、『岩  
波 新・哲学講義』(岩波書店、一九九八年)所収「定義集」のうちの拙稿「志向性」も参照されたい。

(13) これについては、鷺田清一「フロイト——意識のブラックホール」(今村仁ほか編『現代思想の源流』講談社、一九九六年五月)  
を参照されたい。

(14) 前掲ジョンストン『ウィーン精神Ⅰ』参照。また、B・ベッテルハイム『フロイトのウィーン』みすず書房、一九九二年も参照  
されたい。

(15) チェコスロバキア初代大統領であり、チェコの偉大な思想家・政治家でもあるトマーシュ・ガリッグ・マサリクがフッサールの  
同郷の先輩であり、若きフッサールに哲学への関心を芽生えさせ、ブレンターノの講義を聞くようにアドバイスしたのも彼であ  
ったことは知られているが、もう少し、マサリクの内なる「チェコの精神」がフッサールの哲学とヨーロッパの精神に影響を与  
えていることも、まだ解明されるべき課題であらう。これについては、次を参照されたい。カレル・チャペック(石川達夫訳)『マ

サリクとの対話』(成文社、一九九三年)、石川達夫『マサリクとチェコの精神』(成文社、一九九五年)。

- (16) これについて考察することは、私の今後の課題であるが、フェッター教授は、フロイトの精神分析についても造詣が深い。下記の業績に見られるように、これまでに、「フロイトの精神分析の哲学的人間学的な根」、「ディルタイ、フロイト、解釈学」といった論文を書いておられるが、今回の日本滞在においても、浜松医科大学では「精神分析と現存在分析」という講演をされた。
- (17) 以下、ここでの議論について詳しくは、拙稿「見えないものの現象学のために」(『西日本哲学年報』第五号、一九九七年十月)を参照されたい。

- (18) Held, K., "Heidegger und das Prinzip der Phänomenologie". (「ハイデガーと現象学の原理」竹市明弘・小川侃訳、『思想』一九八七年七月)

※付記 一九九七年十一月三日に開催された静岡大学哲学会において、フェッター教授の特別講演が行われた。それに先立って、筆者が講演内容の背景を一般会員のために簡単に解説したが、小論はその原稿に若干の手を加えたものである。フェッター教授に当哲学会での講演の機会を作ってくださいました榊形公也教授(大阪教育大学)に感謝したい。

(はまうず しんじ 静岡大学教授)